総　括

神野藤　昭夫

昨日、今日と百人を越える参加の方々を得ました。そして、十人の方の研究発表と今のルペルティ先生の、今回の講演テーマにまことににふさわしいお話をいただいて、ご参加の方々にはすっかり堪能いただけたのではないかと思います。昭和52年（1977年）に始まりました本研究集会も、今年で28年の歴史を積み重ねて来たことになります。もとより国際的な日本文学の研究集会といたしましては、これほど長く継続的に開催されている大会はございませんし、ただたんに研究発表の場であるだけでなく、日本文学に関心を寄せる方々のネットワークを形成する場として機能してまいりましたことは、これまた大変意義のあることだと思います。

ところで、すでに松野陽一館長からお話がございましたが、本年度から開催の舞台である国文学研究資料館が独立行政法人という組織に変わりました。今年は、その第一回目という、新たな出発の研究集会でもあったことになるわけですが、今後はこの研究集会の意味と成果をなおいっそう広く一般にアピールしていくことが求められていると思います。いささか楽屋裏の話をするようでございますが、本研究集会の性格にふさわしい豊かな大会にするためには、予算の問題があるわけでございます。独立行政法人国文学研究資料館がこの集会にかけることのできる予算規模は、恐らく限られていることだろうと思われます。幸い、日本学術振興会から助成金をいただくことによって国際というにふさわしい大会の開催が可能になっているわけです。ただし、この助成が必ず毎年得られるという保証はないわけでございます。本年も八月にこの研究集会のための企画運営の会議をしているその席上に、助成金を支出するという内示があって、関係者達一同胸をなで下ろしたということがあるわけでありまして、

一回一回の本研究集会の成否に、この集会の将来が深く関わっているというのが現実であると思います。その意味で、今後ともこの研究集会の充実発展のために積極的にご参加いただきまして、もり立てていただきたいと念じております。私たちも少しずつではございますが、新しい企画等を実現して行きたいと考えております。

多くの学会では研究発表者を集めるのに苦労しているという裏事情を耳にしますが、幸いにして、この研究集会にはたくさんの応募をいただいております。従って、ここで発表いただく方をどうしても限定しなければならないという問題がございます。それを少しでも解消する工夫はないだろうか、そういう考えのもとに、理系ではしばしば行われておりますポスターセッション、要するに文化祭の研究発表ではありませんが、ポスターを掲げてそのテーマに関心のある人が集まったところで短時間ではあるが説明をする、ノーベル賞をとった田中さんは本格的な研究発表よりもポスターセッションの方がじかに反応が得られるので好きだと言っておられますけれども。例えば、文系の学会においてもそのようなことができないかどうか。もちろん空間的な問題もありますので、いろいろ工夫をしなければなりませんが逆に短時間でもいいから自分の研究発表を聞いてもらいたい、なおかつそのことについての話題は研究発表会後のレセプションや二次会で存分にやっていただく、例えばそういう実質的な工夫というようなことも今後は考えていかなければいけないだろうと思います。実際どのようにするとうまくゆくかというようなことは今後の課題ではございますけれども、そういうふうなことも考えているということを申し上げておきたいと存じます。

本年度は、「教養としての古典—過去・現在・未来」というテーマを掲げました。現在日本国内における国文学、あるいは日本文学研究と呼ばれる学問とその教育は大きな転機にさしかかっております。教育課程の再編により、中学校や高等学校における古典教育のための時間が削減され、大学における国文学科、日本文学科も学科の再編等により数を減らしていく、そういう時代になっ

てきております。そういう意味では、日本の学問教育における教養としての古典の未来というのは必ずしも明るいとは言い難いところがあります。しかしながら、日本の文学というものを大局的に眺めますならば、すでにただいまの講演、あるいは数多くの研究発表で触れられましたように、古典という教養を財産とすることによって、日本文学はその豊かな歴史を形作ってきた、そういう大きな特色があるわけでもありますし、これは将来の日本の文学伝統の継承という意味でも大きな課題であろうと思うわけです。今回の研究集会はそういう日本の文学のありようについて、国際日本文学研究集会という名にふさわしい様々な視点から光が当てられたところに大きな意義があったと思います。

じつは、八月の運営会議では私は閉会の辞を引き受けたつもりでおりましたが、蓋を開けてみたら総括というふうになっておりました。総括に少しはふさわしいようにと昨日からすべての発表についてまとめてコメントを用意いたしました。しかしながら、ルペルティ先生はきちんと時間を守っているのに、これから十点の研究発表について復習を申し上げるのは甚だ心苦しいので、この会が極めて多彩で刺激的であったということを申し述べておきたいと存じます。私共はこのテーマではやや刺激性が少ないかなと案じていたところではありましたが、そうした心配をよそに充実した大会となったことを関係者として喜んでおります。

なお、来年度については現在テーマ等についても話を詰めている最中でございます。従って最終決定というわけではないのですが、「海外からみた日本文学研究」ということを掲げ、なおかつ一方で、海外と日本というようなあちらとこちらというようなことではなくて、内と外を乗り越えるような形で日本文学あるいは日本文学研究についての議論を展開できたらというようなことを考えておりますし、さらにそうしたテーマだけでなく自由な研究発表の場も保証していきたいとちょっと欲張ったことを考えておりますので、来年もぜひ本集会に積極的にご参加いただきますようお願い申し上げまして、閉会の辞ならぬ総括に代えさせていただきます。ありがとうございまいした。